

雪浪洪恩の行状とその評価について

大澤 邦 由

一、はじめに — 雪浪洪恩の功績

一般に明末万曆期に名高い高僧としては、万曆三高僧として憨山德清、紫柏真可、雲棲株宏が挙げられるが、本稿で扱う雪浪洪恩が一面において万曆年間当時には彼らと並び立つほどの社会的評価を受けていたことはあまり知られていない。

雪浪洪恩（一五四五—一六〇八）とは江南地域、とくに南京（金陵）を中心として『法華経』や『楞嚴経』、『華嚴経』などを講経し人気を博した人物である。講経を主としたため一般には「法師」と称されるが、禪の影響も大きく「禪師」と見做されることもある。

雪浪の生涯については不明な点も多いが、その概要をまとめれば次のようになる。号は雪浪と言い、三懐、三淮とも号した。名は洪恩という。金陵の名家黄氏の生まれで、一二歳の頃金陵（南京）の講寺の大寺である報恩寺（長干寺とも称する）にて出家し、無極法師について華嚴経など經典を修めるとともに二〇歳以降になって詩や外典を学び、のちに圓昂遜庵（法系未詳）に参禅する。後に無極の後を継いで報恩寺の講経の座につき、仏典講説を担いつつ、士大夫と積極的交流して仏教の中興に尽力した。後に南祭酒の官職にあった郭明竜の詩を誹謗したとされてその地位を追われ、呉越に遊んだのち、無錫の望亭に庵を築いて自ら作務をしながら遊行僧に食事をふるまう「飯僧」を行い、しばらくして万曆三十六年（一六〇八）に腹の病により示寂。六四歳であった。著書としては主に彼の詩文を集めた『谷響録』、『雪浪集』、『雪浪続集』が伝わる。

雪浪の功績をまとめれば、特筆すべきこととして以下の六点が挙げられる。

一、董其昌（一五五五—一六三六）や屠隆（一五四三—一六〇五）、馮夢禎（一五四八—一六〇六）、王穉登（一五三五—一六一二）といった多くの士大夫、文化人と積極的交流し、世俗との関わりを重視して士大夫への仏教の影響を拡大させた。彼と士大夫との交流は清談に出入りした支遁（三一四—三六六）にも擬えらるる²⁾。

このことの背景としては、雪浪が一歳にて出家した時の報恩寺の住持であった西林永寧の報恩寺での教育があった。彼は当時の仏教について「切に法門を心配していた。僧徒が士大夫に軽んじられるのを見るにつけ、嘆いていわく、『僧が学ばないがために、名教を辱しめ、法門の名譽を傷つけている』と（切に法門為憂、毎見僧徒見軽於士林、歎曰、『為僧不学、故取辱名教、玷汚法門耳』）」という認識を有していた。イエズス会宣教師のマテオ・リッチ（利瑪竇、一五五二—一六一〇）の次のような報告も西林永寧の言を裏付ける。

僧侶は、チーナでは最も卑しく墮落した連中であり、またそう考えられている。それは彼らの出身階層のためだ。というのも、彼らはことごとく身分の低い貧しい人々の子弟であり、幼児のうちに、両親から年寄りのオシャーンに売られ、やがてその収入と役割を受け継いだものたちだからだ。また彼らの無知と、師から誤った教育を受けたためでもある。それゆえ文字も礼儀作法も知らないが、なかには多少の才能があり、学問に励んで、若干の知識を身につける者もいる³⁾。

西林永寧は僧侶の無教養によって、本来、教団を護持すべき士大夫から僧侶が軽蔑されているという反省のもと、報恩寺に經典の講師として無極悟勤（？—一五八四）や禪の雲谷法会（一五〇〇—一五七九）、及び儒家を招き、それぞれ教育を行わせた。

そのような環境において一二歳の出家から二二歳の際に報恩寺が火災で焼失するまでを過ごした雪浪は「人は、万卷の書を読まざれば、杜詩を知らずと言う。我は万卷の書を読まざれば、仏法を知らずと説かん。（人言不読万卷書、不知杜詩。我説不読万卷書、不知仏法）」や「博く世諦諸家の学に通ずれば、方めて俗に渉り生を利するに堪う（博通世諦諸家之学、方堪涉俗利生）」という認識を抱くに至り、仏典を学び終えた後の二二歳からは儒学や文学や歴史、古辞や賦、詩歌といった外典や文学を積極的に学んで、後には文化人との交流を積極的に行なった。

錢謙益は「万暦年間において、江南の僧侶が多く詩や文章にひろく通じたのもまた公（雪浪）と愍山大師が導師となつたのだ（万暦中、江南開士多博通詩翰者、亦公与愍大師為導師也）」と指摘しており、雪山法果、一雨通潤、巢松慧

侵等の有力な弟子を多く輩出して一派をなした彼は、江南地域における僧の文芸への関与という文化の形成に大きな影響を与えた。

二、講経活動において、「尺掃訓詁」を行って仏典講釈において僧俗問わず非常な人気を博した。「尺掃訓詁」について、憨山は「訓詁俗習をすべて捨て去り、ただ本文のみを掲げ、直に仏意を探り、言外の旨を指示す（尺掃訓詁俗習、单提本文、直探仏意、指示言外之旨）」と説明している。つまり、注釈書に固執して経文を解釈するだけの旧来の講経の方法に異議を唱えたものであり、直接仏典の文句を把握し解説し、揚眉瞬目といった動作も交えて経典講釈を行い教化しようとするものである。このような講経の方法は思想的に言えば、明末の思想潮流に合致したことで出家俗世問わず人気を集めたが、永覚元賢や蕩益智旭等はこの方法に対して批判を行った。このような雪浪の特殊な講経方法は、報恩寺という皇家の寺院の復興のためにその講経という地位についたことにより、禪に好意を寄せつつも講僧としての立場を取らざるを得なかったことに由来すると思われる。また、このことの背景には明代に禪、講、教という三派が規定されたことがある。

三、当時の中国随一ともいへべき瑠璃作りの壮麗な大報恩寺塔（長干寺塔）の補修という事業を自ら街に繰り出して金銭を募ったうえで成し遂げた。この塔は、明初永楽年間に全体に瑠璃を用いて建てられた非常に豪華な塔で有名であり、例えば顧起元『客座贅語』巻五「長干塔」では「その壮麗なさまは古今の仏刹に冠たるもの（其工麗甲古今仏刹矣）」とまで称えられている。地面からの高さは「二十四丈六尺一寸九分」^⑩、およそ七八・七八mほどの巨大な塔であった。なお、この塔は太平天国の乱の戦火により破壊されたが、現在は復元されたものが公開されている。

雪浪の活動の原点は嘉靖四五年（一五六六）に火事でその大半を焼失した皇家の寺院である大報恩寺の復興への思い^⑪であり、そのために彼は經典を修めて報恩寺の講経の地位を師から継承する一方、上述のように詩学などの外典の学習を行い、教養を得たうえで講経を行ったり士大夫等と積極的に交流して檀越を獲得し、最終的にこの塔の修復を成し遂げた。つまり、上記の三点の功績はすべて報恩寺復興に関わると思われる。

四、イエズス会宣教師のマテオ・リッチ（利瑪竇）と万曆二十七年（一五九九）に金陵にて士大夫などの同席のもとで論争を行った。この論争は明末に利瑪竇が中国で布教を開始する際の足掛かりとして重要な論争であり、このことはその議論の内容とともに利瑪竇の記録に記される。利瑪竇の記録においては「横柄な態度」などと彼に否定的な記述ではあるものの、「ほかのオシヤーンとはたいへん異なるところ」^⑫があり、「すぐれた詩人であり、博学で、全宗派によくつ

うじていた^⑤」として、当代きつての知識派僧侶として名を留める。

五、華嚴宗の再興や、『相宗八要』をまとめて基の再来とも呼ばれ、法相宗の中興をしたこともその功績として称えられる。

六、錢謙益『楞嚴經疏解蒙鈔』には『雪浪楞嚴解』の逸文が収録され、その中でも『楞嚴經』の科判である「雪浪恩公楞嚴科判略図」はその他多くの『楞嚴經』科判とは大科を立てないという点において特徴を異にするものであり、錢謙益もこの簡素性を高く評価する。

このように多くの貢献が挙げられる一方で、雪浪という人物やその功績に対する評価は、彼の在世時から現代に至るまで毀誉褒貶、様々な見解がある。彼の品行や「尺掃訓話」などの行為に対しては、雪浪と同時代の人物、例えば錢謙益や達觀真可、雲棲株宏等も彼に対して否定的な評価をしていたことが記録に見え、『万曆野獲編』にもその品行の問題を詳細に記録する。

彼の評価が難しいもう一つの原因は、彼に対する研究の不足であるが、その一因として考えられるのは、彼があえて積極的には著述を遺さなかったことである^⑥。そのような状況でも彼の名声や社交に裏付けられた多くの資料の存在があつて彼の研究はそれらによつて可能である。

雪浪についての先行研究を概観すれば、日本では利瑪竇の論敵として名前が挙げられたり、吉川幸次郎氏が錢謙益との関係において言及する（後述）ほかに、管見の限りほとんど注目されていない。

海外の学術界でも近年まであまり注目されてこなかったが、廖肇亨氏が一九九六年に「雪浪洪恩初探——兼題東京内閣文庫所藏《谷響録》^⑦」という雪浪研究において重要な論文を発表して以来、明末仏教研究が盛んになるに伴つて雪浪の生涯や思想に関する研究も蓄積がなされつつある。現在までに公刊されている主要な論文は、上記のほかに廖肇亨「從一清凉聖境」到「金陵懷古」——由尚詩風習側探晚明清初華嚴学南方系之精神図景^⑧、鄭妙苗「華嚴思想与雪浪洪恩的詩歌創作」、李舜臣、張子川「涵咏性情、遊戯神通」…晚明积氏詩人雪浪洪恩探論^⑨」などがある。これらの研究ではその生涯や思想を徐々に明らかにしているが、特に詩僧としての一面に注目して中国文学史の観点から彼の詩とその特徴、及び彼の詩学がいかに仏教教学（華嚴教学）と結びつくかについて多く述べられている。この中で特に重要なのは廖氏の研究であり、多くの同時代的資料や彼の詩文を分析することによつて不明点の多い雪浪の足跡や思想を論じている。

とはいえ、雪浪の研究は未だ十分ではないと筆者は考えている。生涯については依然として検討の余地のある箇所が多く、思想面についても、禪との関係や『楞嚴經』理解についてなど検討すべき課題が多い。

本論では以下、雪浪研究の緒論として雪浪への評価の中で特に批判的なものを取り上げて彼の品行及びそれへの評価について考察を行う。これは雪浪が果たして研究するに値するかという意味において筆者にとって重要との観点からである。

二、吉川幸次郎氏の雪浪評価をめぐって

前述のように雪浪の人物評価に関しては、生前から現代に至るまで称賛や批判といったさまざまな評価がある。このことは雪浪の社会的影響の大きさを示すものでもあるが、その中でも目立つのは戒行がおろそかで軽佻だという否定的な評価であって、それは雪浪が万暦の三高僧と比肩する名声があつたにも関わらず現在その名を留めない一因であり、そのことはひいては雪浪研究に対して消極的な作用を及ぼしている。雪浪において軽佻とはその戒行と表現内容の両面に対する批判の意味を持つ。

まず、中国文学の大家である吉川幸次郎氏の雪浪評を見てみたい。それは吉川氏が錢謙益と仏教との関係を論じた「居士としての錢謙益」に見える。

憨山、紫柏、雲棲の三大和尚、ないしは雪浪を加えた「四高僧」と、牧齋との関係は、一様ではない。尊敬の中心は憨山にあり、一度の相見によつて終身の尊敬をささげる。紫柏と雲棲は相識ではないが、尊敬は憨山とならぶ。雪浪への尊敬はおとる。

しかし四人の僧のうち一番早く知つたのは、雪浪である。「初学集」六十九の「華山雪浪大師塔銘」および八十六の「雪浪師の書せし黄庭経の後に書す」によれば、牧齋は幼にして雪浪の瓶錫に侍した。これは家庭の関係からであろう。

(中略)

ところで幼年の牧齋は、この肌理は玉の如くにして、高き額、朗かなる目、方なる頤、大いなる口を持ち、鮮衣美食、万巻の書を読まずば仏法を知らずと豪語し、唐詩晋字はもとより、曲をさえ度する和尚に、好感をもたず、衲子の本色を失うとした。牧齋が雪浪を見直したのは、その示寂の前年、万暦三十五年である。時に牧齋は二十六歳、その前年、江南郷試に及第し、既に名士であつた。友人の李流芳と共に、六十三歳の雪浪を、無錫の望亭に訪い、「瞻

嚮の余、心骨清瑩なり、始めて嚮者には師を知ること浅かりしを悔ゆる也」とした。

「列朝詩集」にのせる雪浪の詩を読むと、軽佻の句が目につく。「緑醕は従事と称し、紅粧は用つて書を校す」。請わざるに月は戸に当り、自のずと生ぜし花は園に満つ。単に詩を以つて判じても、雪浪は愍山の敵ではない。

このように吉川氏は雪浪に対して明確に否定的評価を下している。ここで注意すべきは、その多くが基本的には錢謙益の著述及びその評価に基づくものであることである。吉川氏の雪浪への直接的評価は「軽佻」であり、ここでは詩によってその評価を下している。

吉川氏が使う「軽佻」の語は明末士大夫に向けた批判の語の代表格である。例えば、『四庫全書提要』卷一九三には鍾惺『周文婦』に対する解題として、「明末士習、軽佻放誕」という。吉川氏は明末士に見られる否定的特徴を具備した人物として雪浪を見たのである。

吉川氏が軽佻として評価を下す根拠となった詩は、二首ともに『列朝詩集』に選録されるもので、前者は「過安茂卿秦淮寓館」、後者は「過呉仲穆所」と題される⁽²⁰⁾。これらの二首が何故、吉川氏の目に軽佻であると映り、雪浪のマイナス評価につながったのであろうか。

前者「過安茂卿秦淮寓館」緑醕は従事と称し、紅粧は用つて書を校す（緑醕稱従事、紅粧用校書）については、「緑醕」とは美酒、「紅粧」は美女を指す。それらが雪浪の身辺の事実の反映であるか、単なる譬喩であるかは少なくともこの資料のみでは判然としないが、少なくとも酒を飲み美女を待らているような光景を無批判に、享樂的に歌っていることは確かであり、なおかつその光景は後述する『万曆野獲編』の記事を読めば恐らく事実に近いと思われる。

後者「過呉仲穆所」「請わざるに月は戸に当り、自のずと生ぜし花は園に満つ（不請月当戸、自生花滿園）」については、月や花園といった美景が「請わざるに」、つまり努力もせず自然と手に入ってくることを述べている。それは読み方によつては「鮮衣美食」の生活を無反省に享受する態度の頭れとも捉えられる。

つまり、吉川氏の軽佻という批判は引用文の三段落目に見られる錢謙益の雪浪への否定的評価を踏襲して、同等の評価を下したものといえる。

なお、『四庫全書総目提要』の雪浪に対する評価もこれと同様に否定的である。

『雪浪集』二卷、明の釈洪恩撰す。洪恩は、字は三懷、上元の人である。長干寺に居し、いつも雪浪山で説法して

いたため、その名を書名とした。上巻は詩で、下巻は偈語、雑著である。朱彝尊『明詩綜』は其の詩二首を掲載する。しかし世法を離れていない僧であり、語に烟霞を帯びることが（語帶烟霞）できていないのだ。

『雪浪集』二巻、明釈洪恩撰。洪恩字三懷、上元人。居長干寺、嘗說法雪浪山中、故以名集。上巻為詩、下巻為偈語、雜著。朱彝尊『明詩綜』載其詩二首、然未離世法之僧、不能語帶烟霞也。²⁾

「不能語帶烟霞」とは語に霞がかつていない、すなわち詩に奥行きがなく直截的であるさまを批判的に述べるものである。また文中には朱彝尊『明詩綜』に二首が選録されることが言及されるが、そのうちの一首は吉川氏も引用する「過安茂卿秦淮寓館」である。このことから「世法を離れざる僧」や「語帶烟霞」という否定的評価も吉川氏の批判と同様に、「緑醜は従事と称し、紅粧は用つて書を校す」の句が根拠の一つとされていることが予想される。つまり、『四庫全書總目提要』の雪浪への批評も錢謙益や吉川氏の批判と同様のものといえるだろう。

前述のように吉川氏の雪浪評の背景には錢謙益の影響がある。吉川氏が引証とする資料の一つは「跋雪浪師書黃庭後」である。ここに錢謙益の雪浪評の一端を見ることが出来る。

私は幼きより雪浪師について学んだが、そのあでやかな衣を纏い、美食を食し、詩を語り曲に関心を寄せ、一日中ふらふらしているのを見るにつけ、彼が衲子の自分を失っているのではとひそかに疑っていた。丁未（万曆三五年（一六〇七））冬、師を望亭に訪ねたところ、草庵にて飯僧（客僧たちに食事を提供すること）をし、粗末な服で質素な食事をし、静かで質素な生活をしており、まったく昔の姿とは異なっていた。「師は望亭に」居してまもなく示寂した。師は臨終の際、弟子たちが廻りをめぐって念仏していると、師は突如目を見張って「私はこの家風ではない、そのようなするな！」といった。ああ、師の本性とはこのようだったのだ。どうして私の昔の無邪気な幼子の見方とその表層をも理解できたのだろうか。

（余少習雪浪師、見其御鮮衣、食美食、譚詩禪曲、徙倚竟日、竊疑其失衲子本色。丁未冬、訪師於望亭、結茅飯僧補衣脫粟、蕭閑枯淡、了非旧觀。居無何而示寂去矣。師臨行、弟子環繞念仏、師忽張目曰、「我不是這個家數、無煩爾爾。」嗟乎、師之本色如此、豈余向者號嘆兒童之見所能相其仿仏也哉。³⁾

錢謙益はここで雪浪に鮮衣美食、譚詩禪曲といった僧の身分を失した品行上の問題があったことを記すと同時に、雪浪の晩年に相見したときに以前とは面目を一新して質素に暮らしており、臨終間際には毅然とした態度で念仏を諫め弟

子を教化したことを記録し、それこそが雪浪の本来のすがたであつたと述べる。この文章の主眼は後半部にあるが、若いときの墮落した様子も記録している。

確かに錢謙益の雪浪評を他の資料も合わせて考えれば、吉川氏が指摘するように、錢謙益の尊敬の具合は万曆三高僧に比して一段劣る。例えば、錢謙益は『列朝詩集』閩集第三において「高僧四人」としてそれぞれの伝記を載せる際に、他の三者の敬称を「師」とするのに対して雪浪のみを「公」と称するのは、雪浪を高僧として崇めるのではなく、より俗人に近い存在とみなす意識の反映であると思われる。また、錢謙益は「華山雪浪大師塔銘」でも「紫柏可公は、細かに毗尼を持しており、心では非常に師（雪浪）を軽んじていた（紫柏可公、精持毗尼、心頗易師）²³」と記す。これも戒律に無頓着であつた雪浪を紫柏真可の言を借りて批判したものである。

以上をまとめれば、吉川氏の雪浪評は錢謙益や『四庫全書總目提要』におけるそれへの評価を受けたものであり、雪浪の享樂的な処世態度に対する批判的な見解は、雪浪の在世当時から存在しており、それは吉川氏に至るまで連綿と続いていることが確認される。

三、『万曆野獲編』「雪浪被逐」について

沈徳符（一五七八—一六四二）『万曆野獲編』に記される「雪浪被逐」の記事もまた雪浪の世間的評価を考える上で重要な資料である。この記事は雪浪の功績の他、品行問題を細かに伝えているが、以下に記すようにあいまいな記述も多い。沈徳符『万曆野獲編』とは、沈徳符が祖父や父から幼少時に伝聞したものや、自らが見聞した話をまとめたもので、自序によれば万曆三四年（一六〇六）までに二〇巻が著され、その後、万曆四七年（一六一九）に続編一一巻が編まれた。さらにその後にも康熙年間に数次の再編纂がなされ、現行本に至る。この再編纂により、書誌学的観点から見れば、この記事の成立年は未詳であるが、内容から成立年を推測すれば、「雪浪被逐」には雪浪の死は記されず、その人気ばかりが熱気をこめて記されることから雪浪の生前である万曆三六年（一六〇八）以前の成立、つまりはじめに著された二〇巻に含まれる内容である可能性が高いと推測される。

沈徳符『万曆野獲編』「雪浪被逐」は次のように雪浪の功罪を記録する。

雪浪、名は洪恩、初め三淮と号す。もと金陵の名家の子であり、俗を棄て僧となつた。敏慧にして詩を得意とし、

博く仏典に通じ、講肆の翹楚（秀才）であった。容貌は立派で説法も巧みであつて、多く縉紳と交遊した。金陵の大報恩寺塔は壯麗なること、国内随一である。嘉靖四二年（一五六三）、寺は焼失し、塔も次第に傾いた。雪浪はこの塔を資金を募つて修復し、そこでふたたびもとの姿を取り戻した。

しかし性格は佻達（軽薄奔放）であり、細行にこだわらず、友人たちは彼を引き連れて妓女遊びに誘うも、はじめ厳しく拒むことはせず、あるいは宴会や観劇にもよるこんで駆け付けた。時に寇四兒、名は文華という人がいて、坊曲（妓楼）の間で名声を得ていた。彼女はつねに伊蒲の饌（素食）を準備し、彼を屏閣に招いていたところ、ある時雪浪は赴いた。時の議論は騒然となり、そして摩登伽や鳩摩羅什の「ようだという」批判が起こつたが、実際にはそこまでには至らなかつた（実不至此）。江夏の郭明竜（正域）は南祭酒であるとき、彼をきわめて憎み、文書にて追放しようとし、その淫らな行いの各々の状況をつぶさに書いたが、ほとんど明確な根拠はなかつた（幾不可聞）。あるいはいわく、雪浪はかつて陰で郭の詩を誇り、その同僚の僧徒に讒訴され、そこで郭が激高することとなつたというが、そうであるかは定かではない（未知然否）。雪浪はそれ以降、四方をさまよつた。かつて呉越の地方にいたつたときには、士女は狂つたように、受戒礼拝する人は、絶え間なく続き、まちは彼のために市を閉じた。雪浪には侍者数人がいて、みな妙齡の美人であり、高貴な絹織物をまとい、下着も必ず紅紫であつて、ほとんど娼妓の装飾と同様であつた。私はかつてこれを疑問に思い、馮開之（夢禎）祭酒に質問した。「比丘の挙動がこのようであれば、それは果たして禅律に抵触するのではないでしょうか。」馮は笑つて述べた。「まさに吾輩も十数の婢妾を蓄えるようなもので、どうして他日西方極樂に往生し、正覚に登ることに害があるうか。」彼が雪浪を愛護することはこのようであつた。しかし、郭は馮に代わつて司成となつたのであつて、また最も親交があつたのである。

（雪浪名洪恩、初号三淮、本金陵名家子、棄俗為僧。敏慧能詩、博通梵夾、為講師翹楚。貌亦頗偉、辨才無礙、多遊縉紳間。金陵大報恩寺塔壯麗、為海内第一、嘉靖四十二年寺被燬、塔亦漸圯。雪浪募修之、始復旧觀。

然性佻達、不拘細行。友人輩挈之游狎邪、初不峻拒、或曲宴觀劇、亦欣然往就。時有寇四兒名文華者、負坊曲盛名。每具伊蒲之饌、邀之屏閣、或時一赴、時議譁然、遂有摩登伽鳩摩羅什之謗、実不至此。江夏郭明竜為南祭酒極憎之、至書檄驅逐、歷叙其淫媠諸狀、幾不可聞。或云雪浪曾背誦郭詩、為其同儕縉徒所譖、以致郭切齒、未知然否。雪浪自此汗漫江湖。曾至吳越間、士女如狂、受戒礼拜者、摩肩接踵、城郭為之罷市。雪浪有侍者数人、皆韶年麗質、

被服紈綺、即袷衣亦必紅紫、幾同烟粉之飾。予曾疑之、以問馮開之祭酒、「比邱拳動如此、果于禪律有礙否。」馮笑曰、

「正如吾輩蓄十數婢妾、他日何害生西方登正覺耶。」其愛護之如此。然郭即代馮為司成者、亦最相善。²⁴⁾

『万曆野獲編』のこの記事は、塔銘等が弟子や信者によって基本的に敬意をもって記されたものとは対照的に、批判的な視点をもって記されており、雪浪在世当時に世間からどのように見られていたのか、あるいはどのような話が流布していたかを伝える。

冒頭には彼の生立ちや報恩寺塔の修復といった功績を記録する。後半では戒行に問題があったことや追放されて呉越の地を行き来したことを伝える。戒行問題についてこの記事では、友人たちと妓楼に足を運んだこと、宴会や観劇、さらには寇四兒という有名な妓女に招かれて赴いた話が噂となり、『楞嚴経』に見られる摩登伽女が阿難に破戒させた故事や鳩摩羅什と女犯に擬えて批判されていたこと、娼妓のような服装をした侍者数名を連れていたことを批判的に記している。

とはいえ、記事中に「実不至此」や「幾不可聞」、「未知然否」などと記することは、それらの沈徳符の認識における事実としての不確実性を示している。少なくとも雪浪にこのような噂や流言があり、そのいくつかのことは事実を踏まえたものであったことは後述の塔銘等も合わせて考えれば間違いない。とはいえ、例えば、寇四兒との話等に関しては、郭正域の逆恨みによる流言の内容とも読み取ることができる。馮夢禎は郭正域と関係が親しいにも関わらず、郭の敵であるはずの雪浪を擁護したことに沈徳符が疑念を抱いていたようであることもここに記されるところである。馮夢禎はその著『快雪堂集』に雪浪との交遊を記録し、「雪浪師像贊」においては雪浪を「明代の支郎」とまで称えている。²⁵⁾このようなことから考えれば、この記事のみで雪浪の品行問題を断罪することはできない。

少なくとも雪浪の数々の疑惑の中で沈徳符が確実なこととして記すのは数人の侍者がみな妙齢で娼妓のような服装をしていたことのみである。このことは雪浪を擁護したという馮開之も認めたこととされることから信憑性が高い。

雪浪放逐の経緯については廖氏の研究がある。その研究を簡略にまとめれば、雪浪の報恩寺の講經の地位を妬み、取って代わろうとした門人の蘊璞如愚（一五六―一六二二）が同郷の郭正域に密告をしたことを受け、郭は雪浪が自身の詩を誹謗したとして雪浪を陥れ、雪浪は六〇歳の少し前頃（六十之前不久）に金陵から追われることとなった。雪浪は呉越を漂泊したのち望亭に二、三年居して遷化した、というものである。ただし、雪浪がこの事件に遭遇した時期などこの事件の詳細については、筆者は疑念の余地なしとは言えず、以下に記す資料を再度検討した上で論ずる必要がある。

ると考える。放逐事件について記す他の資料としては、顧起元『客座贅語』や錢謙益『列朝詩集』に記録があり、かつ雪浪や蘊璞如愚、鄒迪光等の著書内にもその事件を示唆する記載がある。雪浪や蘊璞如愚の著書の書誌学的調査と内容の検討がこのことについての当面の課題である。

四、伝記資料とその雪浪評について

雪浪の生涯を記録するまとまった資料は、主なものに鄒迪光「華山雪浪大師塔銘」²⁷及び愍山德清「雪浪法師恩公中興法道伝」²⁸「愍山老人夢遊集」卷三〇所収がある。また、錢謙益「華山雪浪大師塔銘」や同『列朝詩集』閩集第三所収の小伝²⁹があるが、前者の文中には「謹按愍師所撰雪浪大師伝而序之」³⁰とあるように、その大半は愍山の「雪浪法師恩公中興法道伝」をもとに記したものであり前二者の重要性に比しては劣る。しかしながら錢謙益もまた雪浪を直接的に知る人物であり、前二者には含まれない雪浪放逐事件に関する記録等もあつて参考となる。

しかし、これらの資料のみでは彼の生涯や思想について明らかにすることはできず、問題が多く残る。それはあいまいな記述が多くあり、さらに記されない事柄も多いからである。

これらに記されない事項として一例を挙げれば、雪浪と利瑪竇との論争がある。これは言わば、事前に舞台設定がなされたうえで、の仏教対西洋思想（キリスト教）の直接的対決であり、当時士大夫から注目を集めたようである。しかし、雪浪の伝記においてこの論争についての直接的言及は確認できない。それは、わずかに鄒迪光「華山雪浪大師塔銘」に、「自然について議し、社会について語り合ひ、中国内にも、世界からも相次いで論争を仕掛けられたが、仏法を擁護する応酬はいずれもが美しい言葉で飾られていた（評鷲山川、抵掌人代、六合之内、九州以外、雲梯相次、金湯酬往、何所不斐亶）」³¹とあるうちの傍線部がその論争を暗示しているのみであり、その著作中にも言及されない。また、『万曆野獲編』に見られる雪浪放逐事件についてもいつ起こったのかといった詳細は記録されない。これらのことは、雪浪の生涯の解明のためには上記の伝記資料や雪浪の著作といった基礎資料以外に雪浪と関係した人物の記録等を補って考える必要があることを示している。

とはいえ基礎資料として上述の塔銘等の記録はその生涯を概観するうえで重要であることに変わりはない。しかしながら、これらに限って雪浪の人となりを造形しようとしても困難に直面する。それはこれらの伝記に見られる雪浪評が

それぞれに異なることである。しかも、これらの伝記の撰者は三人ともに雪浪の生前において接点があつて、どの人物も雪浪を知る立場にあつた。読み手としては、いったいどれが雪浪の真面目なかと戸惑う所となる。これを考えるに、当然のことながらこれらの伝記はそれぞれの立場や視点からの評価であつて、それぞれのバイアスがかかつているのであり、雪浪のイメージが三者の間で異なるのは、三人の社会的な立場や雪浪との関係性が異なるからであると思われる。このことは先行研究においても李舜臣等が次のように指摘するところである。

ならば、雪浪洪恩とはいったいどのような僧であつたのだろうか。我々は、錢謙益、愍山徳清、沈徳符、利瑪竇のいずれであれ、それぞれの描写はすべて事実⁽³³⁾に依拠したものであつて、ただ置かれた立場が異なつただけだと考える。たとえば人の顔つきを見るのに、見る角度が異なれば、得られる印象が大幅に異なるようなものである。（筆者訳）⁽³³⁾

したがつて、これらの基礎資料を読む上で重要なのはまずどのような関係性のもとでその資料が書かれたのかを検討することであろう。

先に鄒迪光、愍山及び錢謙益のそれぞれの雪浪評を端的に述べておくと、鄒迪光の塔銘における雪浪評は恐らくは弟子たちに依頼されて記されたものであつて、少なくとも表面的には雪浪の一信者からの視点において大師を尊崇するという眼差しをもつて記されており、否定的には述べられない。愍山の記すそれは、特に幼少時からの関係の親密さからより親しみをもつて記されており、その功績は大いに顕彰するが、雪浪の軟弱さという点にも触れる。一方、錢謙益の記す伝記や塔銘は愍山の視点を受け継ぎつつも、彼自身の雪浪への否定的評価を反映している。

錢謙益と雪浪の関係についてはすでに吉川氏が指摘するところであるので、以下には愍山及び鄒迪光との関係とそこに記される雪浪のイメージについて検討する。

愍山にとって雪浪は、出家当初から報恩寺で十年以上寢食をともにした一つ年上の兄弟子である。愍山から見たその姿は、少なくとも壮年以前には軟弱なものであつた。このことは「雪浪法師恩公中興法道伝」のみならず愍山の年譜である「愍山老人自序年譜実録」などの様々なエピソードに顕れている。例えば、愍山が金陵から北遊を決意した時の雪浪とのやり取りとして愍山は「雪浪法師恩公中興法道伝」にて次のように記す。

〔雪浪は〕二十五歳、私（愍山）は北方に行くことを決意して、公（雪浪）と雪浪菴で別れを伝えた。公は言った。「あなたは体が弱く、北地は寒さが厳しいので、必ず耐え難かろう。やむなく、私のおばあなを連れて三呉（江

南)をめぐり、その筋骨を鍛えたのちに行くのでも遅くはないであろう。」私は言った。「三呉は安逸の場所である。自分ではひごろ軟弱な気質があることはわかつている。放逸にできないところに行かなければ、この習性は決して治せないだろう。私の気持ちは決まっている。」公は言った。「もし行くのであれば、風雨に備えるため、私が行李の助けを準備するのを待ってくれ。」私は笑って言った。「兄(雪浪)は私の寿命をどのくらいだと思えますか。」公は言った。「どうしてそれを推し量れよう。」私は言った。「兄が年月の計を提供できたとして、どうしてそれが数日で終えることができましょう。」公は心配してやまなかった。私は彼をだまして言った。「兄がもしすつきりしないのであれば、試みに少しそれをやってみてはどうでしょう。」公は大雪を冒して城に入るに、私はすぐにわずかばかりのものを携えて長旅に出た。公は山に戻って私がいないと見るや、思わず声を出して大泣きした。これをもつて公の気質が知られるだろう。

(年二十五、志將北遊、別公於雪浪菴。公曰、「子色力孱弱、北地苦寒、固難堪也。無已、吾姑携子、遨遊三呉。操其筋骨、而後行未晚。」予曰、「三呉乃枕席耳。自知生平軟暖習氣、不至無可使之地、決不能治此、固予之志也。」公曰、「若必行、俟吾少庀行李之資、以備風雨。」予笑曰、「兄視弟寿當幾何？」公曰、「安可計此。」予曰、「兄即能資歲月計、安能終餘日哉。」公意恋恋不已。予諡之曰、「兄如不釈然、試略図之。」公冒大雪方入城。予即一瓢長往矣。公回山不見予、不覺放声大哭、以此知公生平也。)

ここで重要なのは、このようなエピソードを紹介した上で愍山がそれを「此知公生平也」であるとし、このような心配性で友人思い、軟弱で泣き虫の姿を雪浪の気質として説明していることである。この他にも例えば愍山の年譜には雪浪が三十一歳の時、愍山を探し求めて五台山を訪ねた際に雪浪はその環境に耐えきれずに信宿(二晩)にて帰ったことが記されている。これらには愍山の意思の堅固さや性格の豪胆さに比して雪浪の軟弱さが強調されており、それは例えば愍山が妙峰福登を尊敬の目で見るとは対照的に記される。愍山はこのような雪浪の人となりを「公は富家に生まれ、人はみな性習軟暖とみなす(公生於富室、人皆視為性習軟暖)」と述べる。

愍山と雪浪の相見は愍山が罪を得て南方へ流罪となった万曆二十三年(一五九五)が最後であり、それ以降の直接的な面会はない。それでも「雪浪法師恩公中興法道伝」には離別以降の消息も記されており、例えば「及中年操履、篤於苦行」と壮年以降に品行を一新したことも記すが、それらは伝聞による記録であろう。「雪浪法師恩公中興法道伝」は雪浪

と愍山が報恩寺でともに修行していた頃を中心として雪浪が師の後をついで説法を始める以前のこと、が一次資料的に記されるという意味で重要な資料と言える。

一方、塔銘の著者である鄒迪光は、錢謙益『列朝詩集』の小伝(38)や孫敏「鄒迪光及其詩歌研究」(39)によれば、字は彦吉、号は愚公、生没年は嘉靖二八年（一五四九）生まれ、天啓五年（一六二五）没であり、雪浪と比べて四歳年下となる。万曆二年（一五七四）の進士で、黃州府知府や福建提學、湖広提學副使などを歴任した後に、万曆一七年（一五八九）、四〇歳代の半ばにして官を辞し、その後は故郷である恵山（江蘇無錫）に邸宅を築いて、風流な文化活動を行って名士や文化人と交流すること三〇年余りを過ごしたという。また、彼が後半生において仏教に傾倒した様子はその著書である『調象菴稿』(40)に記録されている。この中には雪浪に贈った詩や書簡が収められており、『雪浪集』にも雪浪が彼に送った詩が挙げられている。また、雪浪とも親交のあった屠隆とも親しい交流があったことが確認できることから、鄒迪光は雪浪の交遊圏の一人であったと確認できる。

このような鄒迪光と雪浪の関係から見れば「華山雪浪大師塔銘」は、鄒迪光が崇仏をして以降の雪浪との直接的な交流に基づいてその人物を評価しているものと思われる。

鄒迪光は塔銘において雪浪の根源性について次のように説明する。

剃髮出家して以降、「雪浪は」道はもともと無礙であるのに自ら障礙をつくり、もともと縛りなどないのに自ら束縛されることについて、誰がさえぎり、縛っているのかを考えた。ひたすらにこだわりをなくし、思慮を閉ざし、心を平静とし、規矩を絶し、身体を忘れ、生死を越え、是非を滅ぼし、得失を棄て、偽りの習性を捨て去り、ただのありのままのみを残した。師は書籍によつてこの境涯に達したのである。

（自剃度後、思道本無礙而自礙、本無縛而自縛、誰為去礙去縛。一意盪牽引、屏宮慮、夷城府、絶町畦、忘形骸、外生死、泯是非、委得喪、捐去偽習、独存真醇。師所至以細練。）(41)

このように、鄒迪光は雪浪の根源性について、經典等書籍によつて一切の束縛から解放されたありのままの境地（真醇）を獲得したと述べる。塔銘ではこれに続けて「無偽」という語を多用してその行動を次のようにまとめている。十の施しを受ければ九を他人に与え、あてやかな服を避けて粗末な服を着る（無偽衣）。布施を受ければそれを食し、人はそれを贅沢をしてと訝しんだが気にしない（無偽食）。論争を相次いで受けたが、美しい言葉で受け答えをしたうえで、綺語

で他人を陥れたり、美辞麗句でたぶらかすことはしない（無偽言）。人がふざければ自らもふざけ、誘われれば士大夫とともに名勝巡りや歌舞舞観劇を見ても、それに拘わることはせず、常に心は明晰である（無偽動）。報恩寺塔の募金の際にも一銭も懐には入れない（無偽募）。大蔵経はすべて通達しているが言詮に随わず、法華、円覚、楞嚴、楞伽、涅槃などの經典を講じては了義を明かし、高座に立って人から平伏の拝を受けるようなことはせず、茶と爐を置きはりに抛りながら議論する（不無偽而說法）。そのうえで鄒迪光は次のようにまとめる。

そもそも他の人がみな偽で師はひとり真だったのだ。（中略）師を知らぬものは師を狂っている、みつともない、うぬべれだ、習気が多く、そうしてその生徒を「悪い方向に」導いているのだとみなすが、師はそれらを知らないのだ。師を知る者は真実だ、解脱だ、朗暢（ほがらかでのびのび）だ、自然体で虚飾を張らないのだとみなすが、師はそれも知らないのだ。時に師と並び法幢をたてるものに蓮池（雲棲株宏）がおり、人はあるいは左に蓮池の肩を持ち、右に雪浪の肩を持ち、朝に雪浪をたたえ夕に蓮池をけなしていたが、それも師は知らないようであった。その両目は重瞳（偉人に見られる様相）であり、広い額とほおを持ち、肌は玉のようで、如来の大人相を備えていた。

（夫衆人皆偽而師独真、（中略）不知師者以為狂也、慘也、我慢也、多習氣以導其生徒也、而師不知也。知師者以為真実也、解脱也、朗暢也、自然而然無所矯揉也、而師亦不知也。一時与師並豎法幢者有蓮池師、人或左袒蓮池、右袒雪浪、或朝崇雪浪、夕貶蓮池、而師亦若不知也。乃其双目重瞳、高額広額、肌理如玉、則有如来大人相。）

このように、鄒迪光は雪浪の数々の悪評を記したうえで、それは雪浪を知らぬ人の見解であり、しかも雪浪自身は他人の評価や世間体を気にすることもせず、その姿かたちも如来のように真に解脱をした自然体の人であったと、非常な称賛の辞で雪浪を形容する。ただし、これらの言は弟子たちから請われた塔銘の文章であるという性格上、多少は差し引いて考えなければならぬ。それでもなお、悪評を記したうえでそれを積極的評価に転ずる所には、例えば錢謙益の皮肉味のある表現とは対照的に、鄒迪光から見て雪浪は尊崇の対象であったように思う。

ここで注意すべきはこれらの雪浪擁護の言が単なる享楽肯定ではないということである。すなわち、鄒迪光は雪浪の享楽に見える行為を何にも束縛されず、享楽にも執着せず、すべてが真の反映であるという条件において肯定する。

董其昌や屠隆、馮夢禎、王穉登といった万暦の文化界を代表するような人々が雪浪と交流し、その教えを受けていたことや、雪浪の説法が広く大衆から人気を博していたことは多くの文献で一致するところである。確かにその品行に由

来する悪評は存在し、その悪評もまたある程度事実に基づくものであったと考えられる。それでもなお、その交遊圏においては雪浪に対する士大夫からの尊崇は存在した。鄒迪光の塔銘からは、知行合一が叫ばれた陽明学の隆盛に伴う仏教の流行という文脈での万暦期の仏教受容の側面を見ることが可能である。

五、まとめ

本論ではまず、雪浪の生涯や功績、及び先行研究について概観した。その後雪浪の評価に係る問題について、吉川幸次郎、錢謙益、沈徳符、愍山徳清、鄒迪光のそれぞれの雪浪評を検討した。

これらに散見される雪浪への悪評は、沈徳符『万暦野獲編』の摩登伽、鳩摩羅什になぞらえるような過激な記載を除いては、一定の事実に基づくものであると見られる。しかし、その事実への評価という点には、雪浪とは無関係な沈徳符、彼と交遊のあった鄒迪光、幼馴染みである愍山、交流はあったが少しく批判的であった錢謙益など、様々な見方が存在する。他人からの評価に様々な意見があることは自然なことではあるが、特に交遊圏内の士大夫からは多少の破戒的な行ないも含め尊崇されていた点は、雪浪ないし当期の仏教を考える上で注意すべきであろう。例えば、出家者の観劇については、批判的に見る向きもあるが、例えば雪浪と交流のあった屠隆は著名な戯曲家であつて、彼はその著『仏法金湯』中において雪浪とともに観劇したことを非常に肯定的に記している。⁴⁵

一方、雪浪は壮年以降において生活態度を一変させ、自ら率先して作務を行うなどの禅の影響とも思われる生活を行ったことも伝わる。このような変化が何に基づくものなのかは、雪浪放逐の詳細とともに検討すべき課題である。また、雪浪は坐禅を重視しつつ、禅宗の頓悟主義には否定的であつたこと、『万暦野獲編』に「雪浪などは禅でも宗でもないのに、禅宗の美を兼ね備えようとしていた（如雪浪輩不禅不宗、又欲兼有禅宗之美矣）」⁴⁶と記載されることの意味、彼自身の圓昂遜庵等への参禅についてなど、禅との関係については稿を改めて検討したい。

また、雪浪をどのように評価を行うべきかについては、本論で述べたのはどれも外面的な側面に過ぎず、更にその詩や法語等を自身の言を踏まえて検討する必要がある。そのために必要なのは、不十分であると思われる『雪浪集』、『雪浪続集』の書誌学的な検討であり、それを踏まえた上での雪浪の生涯の再検討である。このほかにも、幅広く支持をされた尺牘訓詁の説法の特徴はその著作を検討することによってある程度明らかにすることができるだろう。『雪浪楞嚴

解』の検討も雪浪を理解する上で重要な資料である。これらの残った多くの課題については稿を改めて考えたい。

注

(1) 錢謙益『列朝詩集』の閩集第三には「高僧四人」として愍山德清、紫柏真可、雲棲株宏とともに雪浪洪恩が一括りとなつて紹介されている(錢謙益撰集、許逸民、林淑敏点校『列朝詩集』閩集第三、中華書局、二〇〇四年、第一二冊、六三四九頁)。また、沈德符『万曆野獲編』卷二七「禪林諸名宿」(中華書局、一九五九年、冊下、六九三頁)でも上述三人と雪浪洪恩の四者のみが万曆期の「名宿」として紹介されている。これらのことは、明末期には、万曆期に著名な高僧として雪浪洪恩を加えた四者が知られていたことを示している。しかし、万曆三高僧が知られ、雪浪洪恩がそこから除外されることとなったのは恐らく、後述するような彼の品行のために、錢謙益が三者より低い評価を与えたことに関係すると思われる。

(2) 例えば沈德符『万曆野獲編』卷二七「禪林諸名宿」に雪浪を説明する中で「高僧(支遁)が馬を養い鶴を放つというような(世俗的)おもむきがある(有支郎畜馬剪雀之風)」(中華書局、一九五九年、冊下、六九三頁)と述べられる。

(3) 愍山德清「南京僧録司左覺義兼大報恩寺住持高祖西林翁大和尚伝」、愍山老人夢遊集』卷三〇、『卍統藏』第七三冊六七二頁中段。

(4) 川名公平訳、マッテオ・リッチ『中国キリスト教布教史』一、岩波書店、一九八二年、一三四頁。

(5) 愍山德清「雪浪法師恩公中興法道伝」、愍山老人夢遊集』卷三〇、『卍統藏』第七三冊六七七頁下段。

(6) 同右。

(7) 錢謙益撰集、許逸民、林淑敏点校『列朝詩集』閩集第三、中華書局、二〇〇四年、第一二冊、六三六七頁。

(8) 愍山德清「雪浪法師恩公中興法道伝」、愍山老人夢遊集』卷三〇、『卍統藏』第七三冊六七八頁上段。

(9) 顧起元『客座贅語』、中華書局、一九八七年、一五〇頁。

(10) 葛寅亮撰、何孝栄点校『金陵梵刹志』卷二、天津人民出版社、二〇〇七年、冊上、八三頁。

(11) 愍山の年譜に次に記される。「そこで(德清は)雪浪洪恩とともに(大報恩寺の)復興の志を決した。そして言った。『この大事因縁は大福德の智慧を具さなければ容易く実現できない。あなたと私は懸命に修行し、徳をためて時を待ってこそ実現できる』と。(即与恩公俱決興復之志。且曰、『此大事因縁、非具大福德智慧者、未易也。爾我当拚命修行、養以待時可也。』)」(福善記録「福徴述疏、愍山大師年譜疏」卷上、新文豊出版公司、一九八七年、一八頁)

(12) その記述は次の如くである。「神父は覚悟して出かけた。リジューチンもそれに備えて、高名な偶像教の説教師を待たせていた。それはオシャーノ「和尚」だった。彼は大勢の偶像教の僧侶を弟子にもつ指導者であるばかりか、無数の男女の平信徒の指導者でもあった。彼はサンホアイ「三淮、三懷」という名前、ほかのオシャーノとはたいへん異なるところがあった。すなわち、彼はすぐれた詩人であり、博学で、全宗派によくつうじていたうえに、みずからの宗派にも精通していたのである。（中略）そのうちに、およそ二〇名から三〇名の人々が全員到着し、例の挨拶を交わすと、横柄な態度を粗末な破れた衣服に包んで、サンホアイは神父の隣りに座った。」（川名公平訳、マッテオ・リッチ『中国キリスト教布教史』一、岩波書店、一九八二年、四二八―四二九頁）このほかにも、「ひどくもったいぶった口調」や「傲慢」などその印象が描かれる。ここではその議論の内容に立ち入らないが、筆者にはこの議論は総じて互いの論点がずれたままに終わった印象を受ける。利瑪竇はこの議論に勝利して南京で大変な話題となったと記し、その議論の内容をさらに『天主実義』の一章としてまとめた。ただし当然、利瑪竇の批判には中国仏教を偶像教として貶めキリスト教を宣布する意図が内在することには注意すべきである。

(13) 川名公平訳、マッテオ・リッチ『中国キリスト教布教史』一、岩波書店、一九八二年、四二九頁。

(14) 錢謙益は「師は文字から解脱していたので、書を著わそうとしなかった（師既擺落文字、不肯著書）」（『楞嚴經疏解蒙鈔』卷一、『已統蔵』第一三冊五〇五頁中段）と証言し、鍾惺「楞嚴經如說原序」（『楞嚴經如說』卷一）にも「近頃の三懷法師は深く經典に通達していたが、一の經典をも注をしなかった。ある人がその理由を聞いたところ、雪浪は言った。『文辞に優れず、なぜ敢えて経を注しようか』と（近三懷法師、辯才無礙、而不註一經。人問其故、曰、『不優文辞、安敢註經。』）」（『已統蔵』第一三冊三八四頁中段）と、謙虚な言葉を伝えている。これが本心かはさておき、積極的には著作を遺さない主義であったことは、残存する著書の少なさからも確かである。

(15) 『漢学研究』第一四卷第二期、漢学研究センター、一九九六年二月。のち、廖肇亨『中辺・詩禪・夢戲…明末清初仏教文化論述的呈現与開展』（允晨文化実業股份有限公司、二〇〇八年、二〇一―二二七頁）に収録。

(16) 『中国文哲研究集刊』第三七期、中央研究院中国文哲研究所、二〇一〇年九月、五一―四四頁。

(17) 『世界宗教文化』二〇一九年第三期、中国社会科学院世界宗教研究所、一六一―一六七頁。

(18) 『人文論叢』二〇二〇年第一期、江西師範大学文学院、一六一―一七一頁。

(19) 吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』一六、「居士としての錢謙益」、筑摩書房、一九七〇年、四一―四二頁。

(20) 錢謙益撰集、許逸民、林淑敏点校『列朝詩集』閩集第三、中華書局、二〇〇四年、第一二冊、六三六七―六三七六頁。なお、雪浪洪恩の著作中では、「過安茂卿秦淮寓館」は『雪浪集』卷上、八丁右（『四庫全書存目叢書』集一九〇、齊魯書社、一九九七年、六七八頁）、「過吳仲穆所」は『雪浪統集』三八丁左（明復法師主編『禪門逸書』統編第二冊、漢声出版社、一九八七年、二二頁）に収録されている。

(21) 『四庫全書存目叢書』集部一九〇、齊魯書社、一九九七年、七三二頁。

(22) 錢謙益著、錢仲聯標校『牧齋初學集』卷八六、上海古籍出版社、二〇〇九年、冊下、一八〇〇頁。

(23) 錢謙益著、錢仲聯標校『牧齋初學集』卷六九、上海古籍出版社、二〇〇九年、冊下、一五七三頁。

(24) 沈德符『万曆野獲編』卷二七、中華書局、一九五九年、冊下、六九二頁。

(25) 馮夢禎『快雪堂集』卷二九、『四庫全書存目叢書』集部一六四冊、齊魯書社、一九九七年、四三〇頁。

(26) 廖肇亨『中辺・詩禪・夢戲』明末清初仏教文化論述的呈現与開展、允晨文化実業股份有限公司、二〇〇八年、二一〇―二二二頁。

(27) 『宝華山志』卷七、『中国仏寺史志彙刊』第一輯第四一冊、明文書局、一九八〇年。

(28) 錢謙益著、錢曾箋注、錢仲聯標校『牧齋初學集』卷六九、上海古籍出版社、二〇〇九年、冊下、一五七一頁。

(29) 錢謙益撰集、許逸民、林淑敏点校『列朝詩集』閩集第三、中華書局、二〇〇七年、第一二冊、六三六七頁。

(30) 同注二八。

(31) 『宝華山志』卷七、『中国仏寺史志彙刊』第一輯第四一冊、明文書局、一九八〇年、二五八頁。

(32) 雪浪の著作中に利瑪竇との議論が記録されないことについて想定される理由は、利瑪竇が雪浪洪恩との論争に勝利したと述べられる（川名公平訳、マッテオ・リッチ『中国キリスト教布教史』一、岩波書店、一九八二年、四三三頁）ことで、雪浪側がその「恥辱」を敢えて記さなかったためとということであるが、筆者がその論争の内容を見るに利瑪竇が勝ったというより、議論の内容がかみ合っていないだけのように見られる。雪浪が利瑪竇のことを記さなかった原因はやはり不明とせざるを得ない。

(33) 李舜臣、張子川上掲論文、一六四頁。

(34) 『憨山老人夢遊集』卷三〇、『卍統藏』第七三冊六七七頁下段。

(35) 福善記録、福徴述疏『憨山大師年譜疏』卷上、新文豊出版公司、一九八七年、三〇頁。

- (36) 憨山德清「雪浪法師恩公中興法道伝」、『憨山老人夢遊集』卷三〇、『卅統蔵』第七三冊六七八頁下段。
- (37) 同右。
- (38) 錢謙益『列朝詩集』丁集第十六「鄒捷学迪光」、中華書局、二〇〇四年、第一一冊、五九七七頁。
- (39) 孫敏「鄒迪光及其詩歌研究」、南京師範大學碩士論文、二〇一四年。
- (40) 『四庫全書存目叢書』集部一五九冊、一六〇冊所収、齊魯書社、一九九七年。
- (41) 『玉華山誌』卷七、『中国仏寺史志彙刊』第一輯第四一冊、明文書局、一九八〇年、二五七頁。
- (42) 同右、二五七―二五八頁。
- (43) 同右、二五九―二六〇頁。
- (44) 屠隆『仏法金湯』下、駒澤大学図書館蔵延宝八年（一六八〇）刊本、冊三、四七丁裏。
- (45) 沈德符『万曆野獲編』卷二七、中華書局、一九五九年、冊下、六九三頁。

〈キーワード〉雪浪洪恩、明末仏教、『万曆野獲編』、憨山德清、錢謙益